

高校時代の活動経験と主体性との関連性について

——主体性評価に際しての一考察——

山田 美都雄（琉球大学）

本研究では、今般の入試改革における主体性評価をめぐる「社会的な」議論を念頭におき、高校時代の活動経験と主体性形成の関連について、主体的な情報取得行動、主体的な志望理由、主体的な学習意思といった観点から、学生調査データをもとに検証した。その結果、普段の授業や受験勉強といった日常的な学習活動も主体性の形成に関与しうること、また、地域社会活動や職場体験・就業体験等の学校外活動が主体性の形成に関連しうること、さらに、部活動（運動系）は主体性の形成に有意な関連性が見られないこと等の知見を提出した。

キーワード：主体性、高校時代の活動経験、学校内活動、学校外活動、高大接続

1 研究の背景

今般の入試改革において、大学入学者選抜における主体性評価が問われている。その社会的端緒としては、平成 26 年 12 月に出された「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(以下、「高大接続改革答申」と呼ぶ)が挙げられる。この答申においては、「学力の三要素」の一つである、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」を、他の二要素（「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」）とともに、大学において発展・向上させることが目標として定められた。

それでは、このような「態度」の形成が「社会的な」課題として掲げられる背景には、具体的にどのような認識があるのだろうか。このことを今回の高大接続改革答申より端的に抽出するならば、とりわけ下記の記述が該当することになると思われる。

「生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。そうした変化の中で、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子供たちに育むことはできない。この厳しい時代を乗り越え、子供や孫の世代に至る国民と我が国が、希望に満ちた未来を歩めるようにするため、国は、新たな時代を見据えた教育改革を「待ったなし」で進めなければならない。」

この記述から、今日の「厳しい時代」を乗り越える

ためにこそ「学力の三要素」の形成が求められていることがわかる。そして、今日の学校教育の問題性については、以下のように言及されている。

「我が国が成熟社会を迎え、知識量のみを問う「従来型の学力」や、主体的な思考力を伴わない協調性はますます通用性に乏しくなる中、現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の「学力」が十分に育成・評価されていない。(中略) こうした状況では、それぞれの夢を育み、その中で自らを鍛えるとともに、秘められた才能などを伸ばすことはできず、未来のエジソンやアインシュタインとなる道や、世界を舞台に活躍する潜在力、地方創生の鍵となる問題の発見や解決を生み出す可能性の芽なども摘まれてしまう。」

ここでは我が国の教育が「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持って多様な人々と協働する態度」などの「真の「学力」」を十分に育成できていないと評され、このような現状に批判的な言及がなされている。

このように、今日の入試改革における主体性評価の文脈においては、上に示すように「社会的な」課題が設定されていることを予め認識しておくことは重要である。なぜなら、「主体性をいかにして評価するのか」という個別具体的かつ実証的な議論に重点が置かれれば置かれるほど、その背景となる「社会的な」課題認識は我々の日常的な思考の範囲の外に追いやり、結果、肝心の「社会的な」効果が得られないという事態に陥ることが容易に想像されるからである。

2 本研究の目的

さて、本研究では、主体性が今日の「厳しい時代」を打開する鍵の一つとなるという見方を前提として、その評価に際して、高校時代の活動経験と主体性形成の間にどのような関連性が見られるのかを学生調査データ等に基づき検証することを目的とする。

なぜこのような目的を設定するのか。その理由は、今般、ただでさえその中身がブラックボックスとなっている主体性の評価を実行する上で、2021年度入試の改革に先んじて、その有効性及び妥当性を誠実に検証することが、本来的に必須の手續きと考えるからだ。

言うまでもなく、今日「社会的」に求められている主体性と全く無関連な材料を用いてそれを評価することがあってはならない。では、実際に多くの大学で主体性評価の具体的素材として扱われることになるであろう高校時代の活動経験¹⁾と主体性の間には、そもそもどのような関連があるのだろうか。また、そこで思念される主体性とは、今日「社会的に」求められている主体性に適うものであると本当に判断されるのであろうか。具体的にいうならば、部活動の活動経験を評価することが、「社会的に」求められる主体性の評価として妥当なものであると、大学は社会に対して胸を張って主張できるだろうか。

今般の主体性評価の文脈においては、まさに、この点が問われることになるのである。これらの検証を経たうえでこそ、主体性評価は社会的に展開されるべきではないだろうか。

3 本研究の問い（リサーチ・クエスチョン）

上述の目的を踏まえ、本研究では、主体性を3つの局面に分けて捉え、それらの主体性の各局面と高校時代の活動経験との関連を探る。

具体的には、受験に際して、出願先の大学情報を主体的に取得したか、主体的な志望理由を設定したか、入学後の主体的な学習意思が描けているか、という3つの局面を設定した。当然ここで、たとえば、西郡（2016）のように、より一般的な主体性の観点を設定することも考えられる²⁾が、ここでは「社会的な」態度としての主体性の発揮を捉えるために、あえて「進路選択」という、受験生にとってきわめて切実かつ現実的な課題を取り上げ、彼／彼女らがこの課題にどのように「主体的に」対処するのかという観点を重視した。

そして、本稿ではこれら3つの主体性の局面に合わせて、次の問い（RQ①～③）を設定する。

RQ① 高校時代の各種活動経験は、主体的な情報

取得と関連性を有するか。

RQ② 高校時代の各種活動経験は、主体的な志望理由と関連性を有するか。

RQ③ 高校時代の各種活動経験は、主体的な学習意思と関連性を有するか。

さらに、ここでは、主体性評価の実践的な運用可能性を検証するために、調査書の評定平均値と高校時代の活動経験の関係についても検証することとする。

RQ④ 高校時代の活動経験は、評定平均値と関連性を有するか。

以下、本研究で用いる分析データ及び変数について説明したうえで分析結果を提示し、その後、まとめと考察を述べる。

4 使用するデータと変数

4.1 分析データの概要

本分析で主に使用するデータは、地方国立大学であるX大学が現況分析のために、2018年4月に実施した新入生調査データ（学部のみ）である。本調査の有効回答数は1041名であるが、分析に際しては、現在の日本の高校での活動経験について取り扱うことから、社会人特別入試、帰国子女特別入試、私費外国人留学生入試の受験者を除く1027名のデータを用いる。調査内容は入学志望理由や大学に関する情報取得、高校時代の経験や入学時点の意識、卒業後の進路等、幅広く設定されている。なお、当調査の対象は、大学に実際に入学した者であり、受験者全般ではない点に注意が必要である。しかし一方で、入学者を対象としているからこそ、一大学における高大接続という意味において、高校から大学入学後の「主体性の接続」（西郡 2016:215）を検証するデータとして一定の意義があるものと考えられよう。

4.2 分析で使用する主な変数

次に、分析で使用する変数について、説明する。

- ・高校時代の各種経験…「高校生のときに、どのようなことに熱心に取り組みましたか」という設問に対し、「普段の授業、受験勉強、文化系の部活動・クラブ活動、運動系の部活動・クラブ活動、地域社会での活動（ボランティア活動・NPO活動など）、外国での留学・滞在、インターンシップなどの職場体験・就業体験、学校以外で開催されるコンテストなどへの参加、個人的に興味のあることの探究活動、習い事、アルバイト」の各項目を選択した回答。
- ・主体的な情報取得行動…「X大学を受験する前

に、X大学のことをどの程度調べましたか」の設問に対し、「十分納得するまで調べた」「ある程度調べた」「調べなかった（「あまり調べなかった」+「ほとんど調べなかった」）」の3カテゴリの回答。

- ・主体的な入学志望理由…「あなたがX大学に入学を志望した理由としてあてはまるものはどれですか」の設問に対し、「自分がやりたい研究を行っているから」を選択した回答。
- ・主体的な学習意思…入学後の学生生活に関する「自分の学びたいことが学べると思う」の設問に対して「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あてはまらない（「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」）」の3カテゴリの回答。

5 分析結果

5.1 高校時代の活動経験の分布状況

まず、新生が実際に高校時代にどのような活動に熱心に取り組んだのか、その実態を確認する。図1を見ると、受験勉強（53.3%）、普通の授業（46.3%）、部活動（運動系）（44.5%）の選択率が相対的に高いことがわかる。それに対し、地域社会活動、留学、職業体験・就業体験、学校外コンテスト等、習い事といった活動は、選択率が4%弱～6%強程度で少数派である。

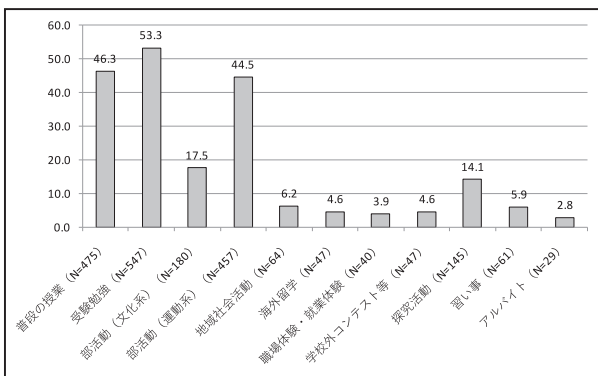


図1 高校時代の活動経験の各項目回答率

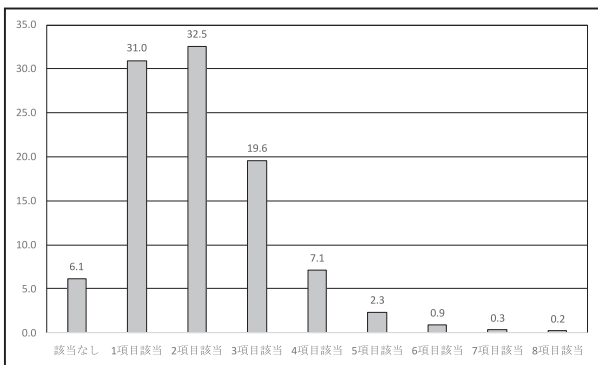


図2 高校時代の活動経験得点（活動数の合計値）

それでは、新生はこれらの高校時代の活動経験について、どれほどの数をこなしていたのだろうか。図2に示す結果を見ると、1～2項目の活動を経験した者は全体の6割強を占め（それぞれ30%を上回る程度）、3項目は2割程度であった。また、4項目は7.1%となり、5項目以上はかなり少数となる。

5.2 RQ1：活動経験と主体的な情報取得行動の関係

つづいて、RQ1について分析した結果を確認する。表1は高校時代に熱心に取り組んだ各項目の選択回答と、主体的な情報取得行動の回答をクロス集計した結果である。この結果に示すように、主体的な情報取得行動と有意な関連を示した活動は、普通の授業、受験勉強、地域社会活動、職場体験・就業体験、学校外コンテスト等、習い事、アルバイトであり、部活動（文化系・運動系）、海外留学、探究活動には統計的に有意な差が見られなかった。また、このうち、順位づけ可能な離散変数間の連関度を示すグッドマン＝クラスカルのガンマ係数（以下、「ガンマ係数」と呼ぶ）が相対的に強かった上位5項目は、職場体験・就業体験、地域社会活動、アルバイト、学校外コンテスト等、習い事となっており、全体的に学校内活動より学校外活動の関連度が強い傾向が確認できる。

5.3 RQ2：活動経験と主体的な志望理由の関係

RQ2についても同様に結果を確認すると、表2に示すように、主体的な志望理由との間に有意な関連が見られたのは、普通の授業、受験勉強、部活動（文化系）、地域社会活動、海外留学、職場体験・就業体験、学校外コンテスト等、探究活動、習い事であり、部活動（運動系）、アルバイトには有意な関連が確認されなかった。

また、ガンマ係数を見ると、学校外コンテスト等が突出して高く、次いで職場体験・就業体験、地域社会活動が相対的に高かった。一方、やはり普通の授業、受験勉強といった学校内活動の関連度は相対的に低めに出ており、有意差が見られた部活動（文化系）についても同様の傾向がうかがえる。

5.4 RQ3：活動経験と主体的な学習意思の関係

RQ3について、同様に表3の結果を見ると、主体的な学習意思との間に有意な関連が確認されるのは、普通の授業、受験勉強、地域社会活動、アルバイトの4項目であり、それ以外に有意な関連は見られなかった。

ガンマ係数は、地域社会活動が相対的に高く、次いでアルバイト、普通の授業となっている。なお、受験勉強については弱い関連が見られる程度であった。

表1「高校時代に熱心に取り組んだこと」と「主体的な情報取得行動」のクロス集計結果

| <熱心に取り組んだこと> | | 主体的な情報取得行動 (受験前に大学のことをどの程度調べたか) | | | 有意差 | ガンマ係数 |
|--------------|--------------|------------------------------------|---------|----------------|---------|--------|
| | | 十分納得するま で調べた | ある程度調べた | ほとんど調べな かった | | |
| 普通の授業 | 選択あり (N=468) | 35.5% | 54.1% | 10.5% | *** | 0.295 |
| | 選択なし (N=546) | 24.9% | 51.5% | 23.6% | | |
| 受験勉強 | 選択あり (N=543) | 34.3% | 55.1% | 10.7% | *** | 0.299 |
| | 選択なし (N=471) | 24.6% | 49.9% | 25.5% | | |
| 部活動(文化系) | 選択あり (N=180) | 32.8% | 50.0% | 17.2% | p=0.616 | 0.054 |
| | 選択なし (N=834) | 29.1% | 53.2% | 17.6% | | |
| 部活動(運動系) | 選択あり (N=453) | 27.2% | 55.4% | 17.4% | p=0.214 | -0.063 |
| | 選択なし (N=561) | 31.9% | 50.4% | 17.6% | | |
| 地域社会活動 | 選択あり (N=64) | 51.6% | 39.1% | 9.4% | *** | 0.403 |
| | 選択なし (N=950) | 28.3% | 53.6% | 18.1% | | |
| 海外留学 | 選択あり (N=46) | 41.3% | 41.3% | 17.4% | p=0.189 | 0.16 |
| | 選択なし (N=968) | 29.2% | 53.2% | 17.6% | | |
| 職場体験・就業体験 | 選択あり (N=40) | 47.5% | 52.5% | 0.0% | ** | 0.479 |
| | 選択なし (N=974) | 29.1% | 52.7% | 18.3% | | |
| 学校外コンテスト等 | 選択あり (N=47) | 46.8% | 44.7% | 8.5% | * | 0.349 |
| | 選択なし (N=967) | 29.0% | 53.1% | 18.0% | | |
| 探究活動 | 選択あり (N=144) | 34.0% | 48.6% | 17.4% | p=0.463 | 0.069 |
| | 選択なし (N=870) | 29.1% | 53.3% | 17.6% | | |
| 習い事 | 選択あり (N=61) | 49.2% | 37.7% | 13.1% | ** | 0.321 |
| | 選択なし (N=953) | 28.5% | 53.6% | 17.8% | | |
| アルバイト | 選択あり (N=29) | 55.2% | 31.0% | 13.8% | ** | 0.373 |
| | 選択なし (N=985) | 29.0% | 53.3% | 17.7% | | |

注 *: p<0.05、**: p<0.01、***: p<0.001。

表2「高校時代に熱心に取り組んだこと」と「主体的な入学志望理由」のクロス集計結果

| <熱心に取り組んだこと> | | 主体的な入学志望理由 (自分がやりたい研究を行っているから) | | 有意差 | ガンマ係数 |
|--------------|--------------|-----------------------------------|-------|---------|--------|
| | | 選択あり | 選択なし | | |
| 普通の授業 | 選択あり (N=475) | 13.5% | 86.5% | * | 0.209 |
| | 選択なし (N=552) | 9.2% | 90.8% | | |
| 受験勉強 | 選択あり (N=547) | 14.1% | 85.9% | ** | 0.312 |
| | 選択なし (N=480) | 7.9% | 92.1% | | |
| 部活動(文化系) | 選択あり (N=180) | 16.7% | 83.3% | * | 0.284 |
| | 選択なし (N=847) | 10.0% | 90.0% | | |
| 部活動(運動系) | 選択あり (N=457) | 10.7% | 89.3% | p=0.691 | -0.043 |
| | 選択なし (N=570) | 11.6% | 88.4% | | |
| 地域社会活動 | 選択あり (N=64) | 23.4% | 76.6% | ** | 0.451 |
| | 選択なし (N=963) | 10.4% | 89.6% | | |
| 海外留学 | 選択あり (N=47) | 19.1% | 80.9% | + | 0.323 |
| | 選択なし (N=980) | 10.8% | 89.2% | | |
| 職場体験・就業体験 | 選択あり (N=40) | 27.5% | 72.5% | ** | 0.526 |
| | 選択なし (N=987) | 10.5% | 89.5% | | |
| 学校外コンテスト等 | 選択あり (N=47) | 38.3% | 61.7% | *** | 0.699 |
| | 選択なし (N=980) | 9.9% | 90.1% | | |
| 探究活動 | 選択あり (N=145) | 18.6% | 81.4% | ** | 0.347 |
| | 選択なし (N=882) | 10.0% | 90.0% | | |
| 習い事 | 選択あり (N=61) | 18.0% | 82.0% | + | 0.292 |
| | 選択なし (N=966) | 10.8% | 89.2% | | |
| アルバイト | 選択あり (N=29) | 20.7% | 79.3% | p=0.126 | 0.361 |
| | 選択なし (N=998) | 10.9% | 89.1% | | |

注 +: p<0.10、*: p<0.05、**: p<0.01、***: p<0.001。

表 3「高校時代に熱心に取り組んだこと」と「主体的な学習意思」のクロス集計結果

| <熱心に取り組んだこと> | | 主体的な学習意思 (自分の学びたいことが学べると思う) | | | 有意差 | ガンマ係数 |
|--------------|--------------|--------------------------------|---------|---------|---------|--------|
| | | とてもあてはまる | ややあてはまる | あてはまらない | | |
| 普通の授業 | 選択あり (N=471) | 53.7% | 45.2% | 1.1% | *** | 0.334 |
| | 選択なし (N=546) | 37.5% | 57.0% | 5.5% | | |
| 受験勉強 | 選択あり (N=545) | 48.3% | 49.9% | 1.8% | ** | 0.161 |
| | 選択なし (N=472) | 41.3% | 53.4% | 5.3% | | |
| 部活動 (文化系) | 選択あり (N=180) | 47.8% | 50.6% | 1.7% | p=0.300 | 0.084 |
| | 選択なし (N=837) | 44.4% | 51.7% | 3.8% | | |
| 部活動 (運動系) | 選択あり (N=454) | 42.5% | 54.0% | 3.5% | p=0.346 | -0.084 |
| | 選択なし (N=563) | 47.1% | 49.6% | 3.4% | | |
| 地域社会活動 | 選択あり (N=64) | 67.2% | 32.8% | 0.0% | ** | 0.465 |
| | 選択なし (N=953) | 43.5% | 52.8% | 3.7% | | |
| 海外留学 | 選択あり (N=47) | 44.7% | 53.2% | 2.1% | p=0.871 | 0.008 |
| | 選択なし (N=970) | 45.1% | 51.4% | 3.5% | | |
| 職場体験・就業体験 | 選択あり (N=40) | 60.0% | 40.0% | 0.0% | p=0.101 | 0.324 |
| | 選択なし (N=977) | 44.4% | 52.0% | 3.6% | | |
| 学校外コンテスト等 | 選択あり (N=47) | 53.2% | 46.8% | 0.0% | p=0.268 | 0.197 |
| | 選択なし (N=970) | 44.6% | 51.8% | 3.6% | | |
| 探究活動 | 選択あり (N=145) | 48.3% | 46.2% | 5.5% | p=0.179 | 0.043 |
| | 選択なし (N=872) | 44.5% | 52.4% | 3.1% | | |
| 習い事 | 選択あり (N=61) | 52.5% | 47.5% | 0.0% | p=0.199 | 0.185 |
| | 選択なし (N=956) | 44.6% | 51.8% | 3.7% | | |
| アルバイト | 選択あり (N=29) | 65.5% | 31.0% | 3.4% | + | 0.373 |
| | 選択なし (N=988) | 44.4% | 52.1% | 3.4% | | |

注 :+ :p<0.10、** :p<0.01、*** :p<0.001。

5.5 RQ4 : 活動経験得点と評定平均値の関係

RQ4 については、高校間で評定平均値の与え方の基準が異なることを考慮し、入学者が 50 名程度の高校 (5 校) を抜粋して、高校毎に高校時代の活動経験得点 (活動数の合計値) と評定平均値の相関関係を分析した。その結果、表 4 に示すように、5 校のうち 3 校において中程度の有意な相関が見られたが、うち 2 校に関しては有意な結果が得られなかった。

表 4 高校時代の活動得点と評定平均値の相関

| | A高校 | B高校 | C高校 | D高校 | E高校 |
|------|-------|-------|---------|---------|-------|
| 相関係数 | 0.368 | 0.603 | 0.044 | 0.074 | 0.372 |
| 有意確率 | * | *** | p=0.741 | p=0.608 | ** |

6 まとめと考察

6.1 主体性形成に有意な関連性を有する変数

RQ1 ~ RQ3 の分析結果において、主体性の 3 つの局面すべてに一貫して有意な関連性を有していたのは、普通の授業、受験勉強、地域社会活動であった。また、職業体験・就業体験、学校外コンテスト等、習い事は、主体的な大学情報取得行動と入学志望理由

に対して、アルバイトは主体的な大学情報取得と学習意思に対して、有意な関連性を有していた。さらに、部活動 (文化系)、海外留学、探究活動、海外留学は、主体的な入学志望理由についてのみに、有意な関連性を有していた。なお、統計的に有意な関連が見られる場合の関連度については、いずれの主体性の局面においても、学校内活動より学校外活動との間の関連度が相対的に高かった。

これらのことから、第一に、普通の授業や受験勉強といった受験生にとってはいわば日常的な営為であっても、主体性の形成に関与するという知見を導くことができる。今日の主体性評価の議論においては、調査書の課外活動欄の改訂が影響したせいも、日常的な学習活動に対する評価が見過ごされがちである。しかし、これらの日常的な学習であっても、主体性の形成に対して有効に機能しうる。たとえば、普通の授業における学習の躓きをどのように克服したのか、受験勉強というプレッシャーに対してどのように対峙したのか、といった側面についても他の活動と同様に評価の対象に含めていくことは、正当な評価を構築するうえで重要といえる。

第二に、地域社会活動や職場体験・就業体験等の

学校外活動が、主体性の形成に関連するということから、これらの活動もまた積極的に評価していくことは有効と思われる。ただし、主体性のどのような側面に着目するかで、その有効性の成否は分かれる可能性があることに注意が必要である。たとえば、地域社会活動は今回検証した主体性の3局面すべてに有意な関連性を有していたが、職場体験・就業体験や学校外のコンテスト等は主体的な大学情報取得行動と入学志望理由のみに有意な関連が見られたものの、入学後の学習意思との間に有意な関連は見られなかった。このことから、入学者選抜において、主体性のどの側面を評価するのかを予め設定した上で、それに対応する適切な活動経験を評価者側が選択し、評価する姿勢が求められる。

6.2 主体性の形成に有意な関連性を有しない変数

次に、今回の分析結果では主体性の形成に関連しなかった活動経験について触れておきたい。特に、部活動（運動系）は、唯一いずれの主体性に対しても有意な関連が見られなかったことは重要である。この結果は、すなわち、運動系の部活動に熱心に取り組んだという情報のみから主体性の評価を行うことは困難であることを物語っている。これらの指標を評価に用いる際には、そこで具体的にどのような活動を行ったのかといった詳細な情報を取得し、慎重に対処する必要がある。

6.3 関連度の強さの傾向について

学校外活動が学校内活動に比して、主体性形成に関与する度合いが強いということについても、主体性のどの側面に着目するかで大きく事情が変更する。たとえば、今回の分析結果でもっとも強い関連度が見られた学校外コンテスト等と主体的な入学志望理由の関係については、今回の入学志望理由が「自分のやりたい研究を行っているから」という「研究」寄りの理由であったことから、関連性の強さが際立ったと思われる。また、学校内活動である受験勉強に関しては、入学後の主体的な学習意思に関しては有意ではあるものの、ガンマ係数は0.161という比較的弱い水準にとどまっている。このように、活動の種類と評価対象となる主体性の領域によって、その強度には変化が生じることを考慮し、評価方法を設計することが肝要である。

6.4 主体性評価としての評定平均値の活用について

RQ4について、高校時代の活動得点と評定平均値

の相関を分析したところ、有意な相関が見られる高校もあれば、有意な相関が見られない高校も見られ、学校によって差が見られることが判明した。このことから、今回の分析のようにあくまで活動種類数の合計値という量的な変数との関連という視点で見た場合、評定平均値の活用可能性が全くないわけではないが、高校毎の違いがある以上、結局はどのような活動を具体的にやってきたのかを質的に問う次元にまで下りて評価する姿勢が求められるといえる。

6.5 まとめに代えて～学校外活動の大衆化・学校化～

今回の分析は、2021年度入試の改革前の時期ということもあり、その状況下での分析であったことを改めて強調しておきたい。というのも、今般の入試改革の流れから、各学校が主体性評価に対応した結果、学校外活動の大衆化ないし学校化が生じることが予想されるからだ。すなわち、これまで少数の者によって主体的に取り組みされてきた学校外活動が、今後大衆化ないし学校化することで、非主体的な学校外活動が広く出現する可能性が生じる。そうなると、「非主体的な学校外活動によって主体性評価を行う」というきわめてパラドキシカルな状況が発生することになる。

主体性評価を実行するにあたっては、現時点で学校内活動も含めた形で、高校時代の活動経験の主体性形成に対する有効性について事前に分析するなど、誠実に検証する姿勢を強く社会に示し、理解を得ることが「社会的に」課せられた重要課題であると考ええる。

6.6 本研究の課題

本研究が残した課題としては、主体性をより実態に即して多面的に捉えること、入学後の主体性変化の状況を追跡調査等によって捉えることなどが挙げられる。

注

- 1) 主体性は個人の内にある性向の一種であるがゆえに、それを評価者が直接的に観察することはできない。したがって、それを捉えるためには評価者が「高校時代の活動経験」に代表される外的な標識を頼りに間接的にアプローチするほかない。
- 2) 西郡（2016）は日本人版新入生学生調査（JFS2013）における高校3年時における主体的学習行動に関するデータ分析から、「自己主張」「向上心」「探究心」の3因子を抽出している。

参考文献

- 中央教育審議会, 2014, 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について」答申.
- 西郡大, 2016, 「どのような学生が主体性を伴う学習行動をしてきたか」山田礼子編『高等教育の質とその評価—日本と世界』東信堂, pp.213-228.